

## 使徒言行録序論

「使徒言行録」は新約聖書の中の第5番目の書である。第3福音書の著者ルカによってその続編として書かれたものであることが両書の序文から推察できる。ルカによる福音書」と「使徒言行録」を書いたルカは、コロサイの信徒への手紙 4:10、11によれば、ユダヤ人ではなく異邦人であり、新約聖書を書き記した人々の中で唯一の異邦人著者として実にユニークな存在であるといえる。

ルカが、どこで、どのような経路でキリスト者になったかは不明である。三世紀後半から四世紀の初めごろにかけて活躍した教会史家エウセビオスはルカはシリアのアンテオケの出身であったと言っているところから、世界宣教の中心になっていた当時の国際都市アンテオケでキリストの福音に触れて信仰を持つに至ったのかも知れない。

彼の職業は医者であった(コロサイ 4:14)。多くの学者が指摘しているように、彼がギリシヤ的な豊かな教養を備えていた人物であったことは、その洗練された立派な文章と、特に歴史家としての資料の収集と選択の巧みさによく表れている(ルカ 1:1-4、言行録 1:1-3)。しかし何よりも彼は、初代教会の宣教の記録を可能にすることのできた信仰に溢れた人物であった。

使徒パウロは彼を「わたしの協力者ルカ」(口語訳聖書では「同労者」と呼んでいる(ピレモン 24)。彼はパウロの伝道旅行の同伴者としてパウロと苦楽を共にした伝道者であった。またローマの獄中までパウロに付き添った人物であった(第2テモテ 4:11)。パウロは肉体的には健康ではなかったため、恐らくルカは、パウロの侍医のような役割も果たしたのではないと思われる(第2コリント 12:7、8、ガラテヤ 4:13、14)。

この書は「ルカによる福音書」とともに「テオフィロ(閣下)」に献じられている(ルカ 1:3、言行録 1:1)。このテオフィロ(「神の友」または「神を愛する人」の意)がどういう人物であったか分からない。或る人は、一人の特定の人物というよりキリスト者全体を代表する抽象的な表現とみるが、恐らくはルカがよく知っているローマ帝国政府内に実在した人物、キリスト者か、またはキリスト教に深い関心を持った人であったにちがいない。

ある伝説によれば、ルカはかつてテオフィロに仕える奴隷の侍医であったが、ある時、重病のテオフィロを看病して治した。そこでテオフィロはその感謝のしるしとしてルカを解放して自由にした。ルカはその感謝の気持ちを表すためにこの書を書いてテオフィロに献呈したという。

使徒言行録は単なる教会の歴史の記録ではなく、信仰の書である。キリストの復活によって決定的に変えられた弟子たちによって、福音があらゆる困難にもかかわらず、エルサレムからローマの世界へと拡大発展していく、生き活きとした教会の宣教の働きを書いたものである。すなわち、キリストの教会を通して働く神の恵みのみ業、聖霊によるダイナミックな歴史形成の働き、信仰による洞察の書である。

「イエスはよみがえられた。われわれの 主、また 救い主」として歴史を導いておられる」という初代教会の感嘆と賛美と信仰の告白の書である。また、それは「聖霊行伝」とも呼ばれるように、教会を通して今も動いておられるキリストの霊のダイナミックな動きを証している書である。